

放射性廃棄物処理に関する

国際的諸問題

去る一九七九年十二月一日、同志社大学アーモスト館で表題の講演が通訳、藤倉皓一郎教授（法学部）、司会、西岡一教授（工学部）で行われた。

人類は放射性廃棄物の処理法を未解決のまま、原子力時代に突入した。原子力の利用が拡大されるに伴い、この問題はいよいよ国際的な舞台に引き出されることになった。S・ギフォード女史は、国際法の立場からこの問題に精力的に取り組み、問題点を鋭く指摘して高い評価を得ている。また、前アーモスト大学副学長、P・ギフォード夫人でもある。

「石油資源は有限」の認識が深まり、各国でエネルギーを原子力にたよる政策が取られてきた。人類の新しい火として大きな期待をもって迎えられた原子力だが、今日、原子炉事故、放射線漏洩、職業的被曝、遺伝的影響

シャーリー・ギフォード

などの問題があらためて浮かびあがり、エネルギー政策全体の見直しをせまられている状況にある。中でも放射性廃棄物の処理には多くの未解決の要素を含んでいる。私は、国際法の立場からこの問題を研究して来たが、ここでは現在の問題点について述べよう。

放射性廃棄物処理の重要性は、一九四二年、人類が核分裂に成功したときから認識されていたが、殆ど合理的な解決法を見出せないまま今日に至っている。その理由として経済的、政治的、あるいは技術的な楽観主義が挙げられる。ワシントンの官僚の優柔不断が原因とする批判も米国にある。一九五三年、アイゼンハワー大統領による原子力平和利用

推進政策に対して「原子力の安全性と放射線障害の防御のための国際機関をつくるべきだ」と勧告がなされた。これに基き国際原子力委員会が設置され、安全性の検査と平和目的以外の使用への監視を行うことが立法化された。ウィーンに設置されたこの委員会は、研究用実験炉、発電炉、さらに再処理における安全性の問題を扱うこととなった。それまでの経験を生かせば、原子力開発に伴う種々の問題が解決できると思われた。しかし、一九五九年、インドはこの方策を拒否した。その言い分は、「原子力先進国では、これまで非公開でありながら、開発途上国に対し公開を義務づけ監視しようとするのは不公平である」というのである。このため、原子力開発は各国のそれぞれのやり方で行われて来た。

米国では原子力委員会（AEC）が置かれ開発と規制を同時に担当した。元来、原子力の研究は、軍事目的から出発しており、非公開が原則であったので、研究成果は発表されなかった。このため、軍事利用で得た研究情報が平和利用に活用されることがなかった。特に原爆実験で知り得た放射性廃棄物処理に関する情報は産業界へは流れなかった。一九



講演中のS・ギフォード女史(右)

七六年になって、弁護士ウォーシュが法律の立場から放射性廃棄物処理に関する書をおらわし、軍部と産業界に相互の理解、経験の交流がない点を指摘した。一九七四年にマサチューセッツ工大のConcern Scientistというグループが出版した本には、放射性廃棄物の問題は、ウラン鉱石を掘り出し、製錬し、炉で燃焼し、エネルギーを得るまでの各段階

でつきまどっている、と指摘した。

これらの本は原子力の安全性に対する世論を高めた。AECがこれまで安全性より開発の面を優先させていたことが浮きぼりにされ批判が高まったのである。その結果AECを開発と規制の二つの機能に分けることになった。同様のことは国際原子力委員会にも指摘される。例えば安全管理の検査官を置くことが規定されていたが、実際にはそのような検査員が任命されたことはなかった。又、廃棄物処理の基準を定めるべきだとされていたにもかかわらず、何らの措置もとられなかった。国際原子力委員会でも最近になってようやく、これまでの怠慢、欠陥を是正する動きが見られる。

一九七九年の『サイエンス』の論文は、米国における放射性廃棄物の対策が一貫していないことを指摘した。世論の高まりを背景にカーター大統領はこの問題を調査するために新しい委員会を組織した。その構成はエネルギー局長を委員長とし、政府の殆ど全ての省庁とその諮問機関を包含する一四の関係機関が下部組織となっている。しかもこの委員会には、科学者、技術者、さらに環境保護論者

なども出席し、いろいろな立場の意見が反映されることになっている。このことから、この問題がいかに複雑で扱がりを持っていくかが推定できよう。米国の原子力問題の中でここで初めて世論が反映することになった。ここから出された報告書にも、これまでの放射性廃棄物の管理・処理・利用において各分野の知識の相互利用が非常に不十分であることを指摘し、それに導入された関係予算の額が極めて少なかったことを批判している。

次に放射性廃棄物の処理方法に関する問題点を述べよう。原子炉内の核分裂により生成する各種の放射性物質は、その放射能のレベルによって三段階に別けられている。非常に放射能の高いもの、中程度のもの、更に比較的低いものである。しかしながら国際原子力委員会で各国の科学者が議論を重ねて来たが、今だに何が高であり、何が中で何が低レベルかの基準について、見解が一致していないのが現状である。

比較的低いレベルの放射性廃棄物、例えば原子力研究所などで放射性を帯びた容器や衣服は浅い土地に埋めて処理されてきた。しかし報告書によれば、過去三十年間のこれらの

処理、廃棄は極めて不十分であったことが指摘されている。

一方、高レベル放射性廃棄物は容器に入れて海洋に投棄する方法がとられてきた。米国では一九七〇年までに十一の海洋投棄区域があったが、現在では閉鎖されている。英国の五〇〇マイルほど南の大西洋に投棄区域があつて五カ国が投棄して来た。この海底で容器にどんな変化が起こっているかについての科学調査はこれまで全く行われていなかったが、最近ようやく十五年前の容器について環境保護庁が調査を開始した。

一九六〇年代の後半からの環境問題に対する世論の高まりは、放射性廃棄物の海洋投棄に対しても大きな反対運動となつて現われた。米国政府は今度は、陸上に八カ所の投棄区域を認めたが、事前の環境、地質調査が不十分だったために数カ所で放射性物質が徐々に漏れていることがわかっている。現在米国内で投棄が可能な区域は二カ所に過ぎない。

一般に最も望ましい処理方法とは、地球外へ放出することであろう。放射性廃棄物をロケットにつめ、地球の周囲軌道にのせる、あるいは太陽の引力を利用して地球の圏外へ放

出する、などである。この方法の問題点は、非常に高価であること以外にロケット打ち上げの際に事故が起る可能性を否定できないことである。そのような事故が起れば、高い放射能で汚染される地区が生じ、重大な障害が予想される。従つて理論的に可能でもこれまで試みられたことはない。高レベルの廃棄物を北極または南極の氷山に捨てする方法も考えられたが、国際協約は両極に放射性物質を持ち込むことを禁じている。さらに火山活動のマグマに注入する処理法も考えられたが、放射能の拡散経路の予測が困難であるなどの理由で実現しない。最後の方法としては廃棄物を再び原子炉中に入れて原子核変換をさせるのだが、これはまだ現実ではない。

現在、米国の環境保護庁は放射性廃棄物の放射能が半減するまで容器の中にとじ込める方針である。放射性廃棄物をコンクリート容器に入れ深い坑内に投棄するものである。カナダでは、高レベルの放射性廃棄物を特別に作られた建築物中に保存することを考えている。ソ連では廃棄物を一定箇所集中して陸上で処理することを考えている。英国は放射性廃棄物の海洋投棄の最大国であり、日本

も又、何千マイルも放射性物質を運んで海洋投棄を行っている。問題解決のため国際原子力委員会は各国からの放射性廃棄物を国際的に登録すべきであると主張したが、ここでも軍事機密に触れるなどの理由で主要国の反対を受けている。

結論的には、現時点で本当の意味での処理法はないということであり、技術的にこれを解決するにはなお二十年以上の研究と莫大な研究費が必要であるとされている。

スリーマイル島の事故の調査報告書によれば、原因は技術より人間的な要因にもとづいていること、「原子力は本質的に危険なものである」という原則に従い制度や組織を変えらるべきだと指摘している。しかし、その中で、事故で生じた放射性廃棄物について全く触れられていない。その処理には、十億から二十億ドルかかると見積られているが、これが誰の負担になるのか。電力会社か、最終的に消費者かという問題も残されたままである。

放射性廃棄物の問題は緊急に解決すべき事柄であることはもはや誰の目にも明らかであり、そのためには世界各国の協力が何よりも必要である。

JALT 国際大会と最新の語学教育

北尾謙治

同志社大学新町校舎において、十一月二三日の三日間、JALT (Japan Association of Language Teachers) の年次大会の初の国際大会である Language Teaching in Japan '79 (LTIJ '79) が行なわれた。

JALT は、日本における語学教育の向上を目的とし、一九七五年外国人教師を中心に発足した。世界最大の英語教育者の学会 TESOL の支部として急速な発展を遂げ、現在全国に七支部を有し、さらに三ヶ所とハワイに支部が出来つつある。

会員数は約千百名で、半分が日本人、他は十五〜十六ヶ国からの外国人である。英語教師(四割が中・高・大)が八割であるが、数ヶ国語の教師や学生等もいる。

年に六〜七〇回行なわれる支部研究会で、新しい教授法や有益な技法を紹介している。海外より講師を招いたり、教員養成プログラムを行なう。毎月英文二八頁のニュースレターにより海外の新しい動向や情報を提供する。研究助成金制度、年二回の英文紀要の発行もある。

同志社は JALT と関係が深く、同志社で英語を教える者のうち三十名程が会員である。

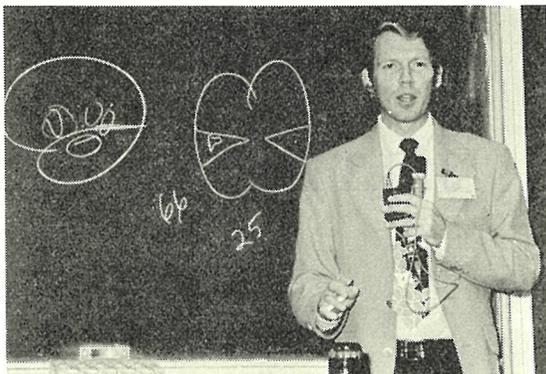
関西支部の研究会を同志社大学や女子大学で行なったこともあり、昨年五月より毎月 TAs (Teaching English in Schools Special Interest Groups) の研究会も小田・宮本先生を中心に同志社大学で行なわれている。LTIJ は、他の英語教育学会と異なる点がいくつかあったと思う。

第一は国際色豊かなことで、五百三十名の参加者の約六割は外国人で、海外からの参会者も十名程いた。それで、案内、掲示等すべてが英語で行なわれた。

第二は欧米の学会形式を取り、一日目はワークショップとミニコースのみが行なわれ、本大会は二四日、会長の大阪外大客員教授トーマス・ペンダーガスト先生と上野総長の流暢な英語の挨拶で始まった。

第三は実践面が重んじられ、研究発表のみでなく、日頃苦心して開発された技法や、新教授法とその応用のモデル授業のようなものが多く、教員養成の色彩が強い。

第四は情報が多いことである。九十頁余りのプログラムには、地図、同志社の歴史や写真、スケジュール、発表要項、発表者の経歴、レストランの案内等必要な情報が載っていた。



ゲスト・スピーカーのカール・ディラー博士
Karl Diller

今大会のゲスト・スピーカーは、ニュールンプシャー大学のカール・ディラー博士で、神経言語学の立場から聴解と発話の指導に関する講演があった。

七十四人の発表者の内、二十二人が日本人、三十人程が大学教員で、十名が同志社の教員であった。発表は大きく分けると、(一)語学クラスにおける活動や技法、(二)新教授法、(三)聴

解、(四)文法、(五)読解と文学教授であった。

今大会のユニーク性は、(一)～(三)であろう。数多くのバラエティーに富んだ技法が紹介された。聴解は今とてもブームで多くの外国人教師の人氣があった。

新教授法は七十年代になって世界の注目を集めているサイレント・ウェイ、カウンセリング・ラーニング/コミュニケーション・ランゲージ・ラーニング、トータル・フィジカル、レスポンス、コンプリヘンション・メソッド、ドラマ・メソッドが主なものであった。

これらの教授法の特徴は、(一)知的、情緒的、身体的に言語と取り組む。(二)帰納的な方法より言語を学習する。(三)母国語とは異なる習得方法を考慮する。(四)学習者が自ら間違いを訂正する。(五)初歩の段階からコミュニケーションする。(六)学習者中心の教育で、学習者同士が共同で学習する意識を高める。(七)創始者のほとんどが言語学者でない。(八)言語より学習過程が注目されている。

これらの新しい教授法を理解する最良の方法は、教師自身がこれらの教授法で未知の言語を学んでみることで、よく理解すると、クラスへの応用の可能性は無限にあると思う。

多くの発表が、数多くの教育機器を利用して巧みになされていた。その使用はクラスをより立体的にし、効果もあがる。とくにビデオテープの上手な使用は研究に値する。

教材研究も熱心で、同志社大学の岡田先生達の開発したL1教材及びティラー先生達の英文テキストに関する発表もあった。

その他に、松本道弘氏の異文化間コミュニケーションや同志社大学や女子大学教員による日本の英語教育の現状に関する発表があったのも本大会の特徴であろう。

パーティー等の社交行事もあり、多くの語学教師が知り合い、友情が芽ばえた。この友情は北海道や沖縄まで、日本の隅々まで、さらに海外にまで広がり、今後の幅広い活動が期待される。

今大会は、浜田公一先生を中心に、英語・英文学科と商学部の教員及びJALの委員により行なわれた。さらに、全同志社の英語教員の懇談会のおかげで、全同志社の英語教員の協力があがり、多くの参会者は満足し、同志社が語学教育向上のために貢献できたことを嬉しく思う。

(大学商学部専任講師)

ラグビーと国際親善

— デントン先生とラグビー —

末光力作

昨年の秋、私は英国ウエールズのパンゴールにあるノースウエールズ大学に数週間滞在する機会があった。ラグビーファンの私は生化学教授エンバス博士に「良い機会だから是非本場のラグビーを見たい。一つ宣敷く。」と頼むと、これまたラグビーファンの教授は「よろしい。まかせとけ。」という具合で、早速私を大学のグラウンドに連れて行ってラグビー部監督のグレイ氏に紹介して下さった。彼は往年のウエールズ代表選手として活躍した人で、早速「明日ここから車で一時周程はなれたリールの町で大学対抗戦があるから、私の車で一緒に行こう。」と話はトントン拍子にきまった。彼は大学の体育の先生で、日本のラグビーについてもかなり詳しく、勿論、同志社の名前も知っていた。ゲームは緑したたる美しいローンのグラウンドで行われたが、私はこんな良い環境でゲームをやれば怪我もせず、さぞ快適だろうと思った。そこで活気溢れる好ゲームが展開され、私は充分満足であった。試合後、ラグビー協会の人々にも紹介され、ビールを飲みながら誠に楽しい歓談の時を持ったのである。考えてみると、このような愉快な経験も私がラグビーファンであ

ればこそこのことで、改めて身の幸を感じた次第である。

同志社ラグビーは昭和五六年で創部七〇周年を迎えるが、その間行われた数多くの国際試合を通じて同志社の馳名は海外にも紹介され、同時に国際親善の成果を大いに上げてきたのである。同志社には数多くのスポーツ部があるが国際スポーツとしての実績を考えるとラグビーはその最右翼に位するものである。

日本のラグビー界の発展に忘れてはならないのは外人クラブの存在である。神戸と横浜にそれぞれチームがあつて、慶応、三高、同志社は外人の胸を借りて本場の技術の習得に務めたのである。同志社と神戸外人との一回戦は大正二年一月一八日に神戸の東遊園地で行われた。ゲームは一八一三で破れはしたものの、同志社が誇る名ウィング大脇順路は快足よく左隅にトライをあげ、文字通り一矢を報いたのである。実はこのトライは邦人チームが外人チームと対戦して始めてあげたもので、歴史的なトライであった。由来、外人チームは敵にトライを許すことに対し、かなり強い抵抗感を持ち、廉恥の情を持つようであ



美しいローンでのラグビー戦（筆者撮影）

る。翌一月一九日付の英字新聞クロニクルの記者は「同志社チームの快挙にケチをつけるつもりはないが、やらずもがなのトライだった。」と悔しがっている。日頃、胸を借している相手に一本とられて余程残念だったのであろう。一方、当時の同志社時報は「スクラムの球は見事わがハーフに渡り、大脇、ハーフよりパスを受けて突進、開戦二十分にし

て左隅にトライす。けだし此の地に於ける本邦人としての始めてのトライにして、いささか我軍の誇とするに足るものなり。」と記し、誠に意気軒昂たるものがあつた。外人戦での楽しみは、その頃まだ数少なかったローンで試合ができることで、試合後のパーティではおいしいケーキのご馳走にあづかれるのも大きな魅力であつたらしい。キャプテンは英語でリセプションの挨拶をやり、英語に強いラグーマンは自由に外人と歓談したという。

さて、英字新聞クロニクルの記事を読んで心から快哉を叫んだ一人の外人女性がいた。

この人こそ同志社女子部の名物女傑デントン先生であつた。先生はお料理が専門、早速部員をデントンハウスに招待して、先生お得意の手料理のご馳走で労をねぎらつて下さつたのである。あの古ぼけた木造のデントンハウスにラグーマンが招待されて先生と親しくラグビーのことを語り合っている姿を想像するだけでも愉快になつてくる。私はかつて、すでに故人になられた初代キャプテン広岡久右衛門翁にお目にかかつて当時のことをお伺いしたことがあるが、翁はデントンハウスでのリセプションのことをまるで昨日のことの様

に目を輝かせて話して往時を懐しがつておられた。デントン先生は大変な読書家であつたと聞いているが、クロニクルに掲載されたラグビーの記事まで読んでおられたのは誠に驚きである。そして先生は恐らくラグビーに關して何の知識もお持ちでなかつたと想像されるが、同志社ボーイズたち良くやつた。という温かい気持ちだけでご招待になつたのであろう。このあたりいかにもデントン先生らしく、先生の一面を語る面白い逸話であると思ふ。私はこの特ダネを発見して、いささか鼻が高いのである。

その後、同志社は何度か神戸外人戦に惜敗を繰り返していたが、大正五年二月の試合では一四一〇で完勝するに至つた。これは邦人チームが神戸外人チームを破つた最初の快挙であつた。明治の日本が「お雇い外国人」の献身的な努力のおかげで近代化に成功したように、その後の同志社ラグビー発展の素地はこの辺で養われたのである。同志社を愛して数多くの貢献をされたデントン先生が同志社ラグビーの発展にも尽しておられるのを知つて心温まる思いがするのである。

（大学工学部教授）

不思議なる邂逅

西邨辰三郎

今から思えば、約十五年前のある秋の美しい午後、私は久しぶりにバーナード・リーチ先生に会うことができた。昭和三十九年、場所同志社のアーモスト館のロビーであった。「バーナード・リーチに聴く」と題する珈琲アワーで、集まる者約三十名。見渡すところ多士済済であった。私は大きな期待をもつてこの会に臨んだ。

かつて式場隆三郎博士編著の「バーナード・リーチ」という分厚い本の中で、志賀直哉さんが、次のように言っておられる節がある。「リーチとの関係は我孫子に住んでからでそれも常に柳宗悦を通じてのもので、余り深

くはないが、リーチが純粋な気持の人であることはよく感じられた。

リーチは東洋のものをまことによく理解した。鋭く、素直に。殊に素直にという事は気持ちがよくかった。所謂東洋好き、東洋趣味の人は少くないが、リーチのはその範囲とは全く別だった。『ハーンの書いたものは過去の日本で、現在の日本ではない。』或時こんなことを言った。現在の日本を理解する者は自身だという口吻だった。

七十歳をはるかに超えられたリーチ先生はやさしくもまた犯し難い品位ある風貌で、正面のソファアに深く腰をかけ、少し前かがみ

に座談的に喋られた。内容は、「西洋人から観た東洋の美しさ」というような筋の通ったお話で、鈴木大拙や柳宗悦先生の話も出た。私どもは、日本語の少ない語彙で、却って感じが圧搾されて出てくるような先生の話に、魅了されてしまった。

珈琲が運ばれた休憩の一時、私は先生の前ゆき「同志社で先生の話を聴くのははじめてで、大変うれしく思います」と挨拶すると、先生は大きな手を差し延べて、「ぼくは一九〇九年、同志社で結婚式を挙げました」と言って、堅く私の手を握られた。また私が柳先生の弟子だということを知られた先生は、莞爾として、「あなたとぼくは友達」とも言っ下さった。

挨拶を済ませて、自分の席へ戻ろうとする途端、宗教同志会で親しい相国寺の塔頭長得院の緒方宗博老師が、私の方を向いて手招きをしておられる。隣りが空いているから、こちらへ来いと意である。私は老師の友情を謝し、隣りの席へおもむろに腰をおろした。すると老師は、「こんな席で失礼ですが、私はあなたの奥さんの長逝を心からお悔みします。お墓はどちらですか？」といわれた。私



在りし日のバーナード・リーチさん

は即刻私の心境を包み隠すことなく、小声で次のように述べた。一つには悲しむ娘たちの願によって、遺骨全部を白磁の壺に収めているため西大谷の西邨家墓地には収納しきれないこと、二には私がキリスト教徒であるため、寺に納めることに多少の不安を感じていること、を述べた。すると老師はそれこそ即座に、「長得院に來られてはどうですか」とおっしゃった。

やがて第二部がはじまり、リーチ先生と会衆の間に、質疑応答があった。私はそれらの話をききながらも、緒方老師の間に答えるべき用意をしなければならなかった。

会が終ると、リーチ先生と私は再三の堅い握手を交わして別れ、緒方老師とともに、同志社に隣接する相国寺の森を、長得院にむけて歩いていった。老師は言われた。「私は余り仏教とかキリスト教とかにこだわってはいません。ミス・デントンの墓も長得院にあります。ただ十字架のしるしだけは、デントンさんを除きしていただかないことになっていきます。それでよければ墓地を見て下さい。」と言われた。

室町時代、足利義満の発願によって創設された相国寺は、禅宗五山の第二位に列位し、(五山)の上位は天皇の建立である南禅寺その貫禄を示すにふさわしい法堂は、厳然と森の中に聳えている。戦後第二回目の全国民芸大会は、この相国寺の方丈で行われ、そこでは還暦を迎えられた柳先生が「美の法門」と題する講演をされた。塔頭が十二寺あるいちばん北寄に、長得院は位置している。緒方老師は博学の名僧で、かつてはアメリカのシカゴ大学神学部で、キリスト教組織神学や、比較宗教学を専攻されたこともある。当時は花園大学の教授でもあられたが、尊大なところは微塵もなく、ただ淡淡としておられた。バ

ーナード・リーチ先生とは、以前より親交が厚く、先生が入浴される折には、一度必ず長得院を訪ねられるのが常であったそうだ。それは、先生のダーネル夫人が、かつて長得院で、坐禅の修業をされたことにもよる。

長得院の院門を入ると、今を盛りの紅葉や手入れの行届いた五葉の松や、夏には桃色の美しい花を咲かすさるすべりの樹が苔むす庭に繁茂している。大きな庫裏が見え、本堂を左折すると、やがて幽玄静寂な墓地に入る。ミス・デントン——同志社女子教育のため六十年にわたる奉仕を完了した宣教師——や元同志社女子大学長加藤謙爾先生の墓が見える。老師はその次の空地を指さして、「ここはどうでしょう」と問われた。「でも余り偉い先生の側では……」と躊躇の色を見せると、老師は首を横にふり、「人間に上下の区別はありません。民芸の心と一緒にです。」との答えであった。私は老師の親切を謝し、その場所に墓を建立することに決めた。

その後私は墓の形について思考を練った。かつて河井寛次郎先生は、「墓は五輪がよい」と言っておられた。外村吉之介さんは、「朝鮮の土を饅頭形にもり上げたあんな自然の墓



リーチさんの陶芸

に入りたいね」とある民芸講座で語られた。墳墓は霊の住所であってみれば、これを疎かに造形することはできぬ。

私はその年の晩秋、まず東京の小平霊園に永眠される恩師柳宗悦先生の墓前に頷づいた。続いて、尊敬している元慶応義塾長小泉信三先生の墓を多磨墓地に訪ねた。柳先生のお墓について、日本民芸館の田中豊太郎氏に意見を聞くと、「ありや宗理君のデザインですよ」といったきり、ご自分の意見は言われなかった。小泉先生のお墓については、小泉信三全集第十七巻（わが蒔く種の人物論一五四頁）に次のような文がある。

「自分の父の墓を褒めるのは可笑しいが、

私は何時もこの墓の形の美しいのに感心する。思い切って広く、厚い三重の花崗岩の上に、短い四稜の石碑が立っており、その安定感と堅固感は、ちょっと類がないように思う。これは辰野博士自身の意匠に成るものか。或いは人に命じて設計されたものか。いずれにしても墓参のたびに嘗て母がしたように、私もよく妻や子供に向って辰野金吾の名を口にするのである。そうして『辰野隆さんのお父さんだ』ということも付け加えていった。」

（注）辰野金吾 日本近代建築の先覚者。東大でコンドルに建築を学んだ後、英国に留学後東大教授として、また設計者として明治・大正建築に貢献。門弟に伊東忠太、関野貞、大熊喜邦らがいる。建築設計では日本銀行本店、東京駅等が著名。子の辰野隆は仏文学者。私はかくして、幸いにも柳先生や小泉先生ら先哲の清浄静寂なる霊墓にあやかっ、それから間もなく、西郷の石碑を長得院内に建立することが出来たのである。

私は墓参をするたびに、今は亡きリーチ先生や緒方老師との不思議な邂逅の秋を想う。人は変り世は移る中にも、永遠に変わることなき友情の尊さを思う。また人為をはるかに超

えた神の摂理、これを仏教的に言えば、不思議な因縁に、頭を垂れざるを得ない。今や再度訪ねしことのあるなつかしいイギリスに、永遠に眠られるリーチ先生のご安魂を祈りつつ、この筆をおく。

（元香里中・高教頭
京都民芸協会専務理事
宗教音楽家）

